

皆さんは「台湾製」と聞いてどんなイメージを受けるでしょうか。1987年に公開されたアメリカ映画「危険な情事」では、主人公（マイケル・ダグラス）が持つ、風にあおられて壊れた傘むかって「それ台湾製ね」と通りかかった女性が揶揄するシーンがあります。

約十年後、1998年に公開された「アルマゲドン」では、トラブルが起きた宇宙船内でロシア人宇宙飛行士が「(宇宙船の装置が) ロシア製だろうがアメリカ製だろうが、中身は台湾製だ!」と叫ぶシーンがあります。前者はあからさまな粗悪品、後者はハイテク製品に無くてはならないキーコンポーネント、というイメージが現れています。いずれも映画、フィクションですが、実際、今日パソコンもスマホも、中身は台湾製品で溢れています。

そんなハイテク台湾の原動力のひとつとなったのが、台湾工業技術研究院（Industrial Technology Research Institute）、通称 ITRI です。設立は1973年、その名称から、日本の旧工業技術院（産総研の前身）をイメージさせますが、設立当初からイノベーション・産業化を指向した特殊法人としてスタートしています。旧工技院より、フラウンホーファー研究機構（ドイツの産業支援、応用研究機関）に近く、時代を先取りしていたと言えるでしょう。現在の陣容は新竹市を中心に14研究キャンパス、6000人のスタッフを擁し、日本、米国、欧州、ロシアに出張所を持ち、これまで産業界、経済界との密接な連携により数多くのスピノフを生み出しています。その代表例としては世界トップのファウンドリ（導体製造のみを専門に行う工場）のTSMCなどがあります。



図1. ITRIの外観



図2. 誇らしげに展示された、商品化された研究成果の数々



図3. ハイテク台湾の象徴、TSMCの歩みを伝えるTSMCイノベーションミュージアム
創業者であるモリス・チャンの逸話がこれでもか、と紹介される

そのようなハイテクを計量標準の面から支える、Center for Measurement Standards (CMS)と呼ばれる計量標準機関も ITRI の一研究機関としてその傘下に置かれています。

CMS のスタートは容易なものではありませんでした。台湾は多くの場合国際機関への加盟や活動に制約があり、例えば国際比較に参加することも容易ではありませんでした。これは国際同等性を前提とする計量標準機関にとっては致命的です。そこでやはり国際的な活動に制約があった南アフリカ（アパルトヘイト当時）と協定を結んで相互比較をしたり、個別協定で他国からの協力を仰いだり、といった努力を続けてきました。

ITRI のスタートに遅れること 14 年、1987 年に設立され、30 周年を迎えた CMS は、アジアでも有数の計量標準機関となっています。



図3. 30周年を記念して開催された記念シンポジウムのキービジュアル
漢字で意味が判るところが嬉しい

一方で、産業化、イノベーションを指向する ITRI にあって、直接の効果が見えにくい計量標準を扱う CMS のマネジメントには、難しさもあるようです。同業者としては、身につまされると共に、その重要性を広く知って欲しいところです。

文責: 臼田孝 本文章は個人の見解であり筆者が属する如何なる組織を代弁するものでもありません。引用明記のない写真・図版は筆者または産業技術総合研究所に帰属します。